

# 真山青果「国定忠次」関係資料をめぐって

## ―草稿資料の検討から見える本文の生成過程と執筆方法―

大貫 俊彦

\*キーワード

真山青果・国定忠次・戯曲・直筆資料・本文の変遷

### 一、はじめに

ひ読んでいただきたいが、本論考もまた青果文庫の資料の魅力を紹介し、青果研究の可能性を探るためのものである。

現在、星槎ラボラトリーが所蔵している「真山青果文庫」については、数年間にわたる国文学研究資料館の書誌調査と、その間に行われた貴重資料の展示「真山青果旧蔵資料展―その人、その仕事―<sup>①</sup>」およびシンポジウム「真山青果の魅力―近世と近代をつなぐ存在―<sup>②</sup>」を経て一段落が付き、調査で得られた情報はデータベースで公開されている。集積された書誌データが青果の蔵書の相貌を知るうえで重要であることは改めて指摘するまでもないが、稿者が最後の数年間の調査に関わって感じたのは、やはり直筆資料の豊富さとその魅力であった。このことについては調査に携わった委員が「真山青果とは何者か？」（文学通信、二〇一九

前掲の「調査余録」では菊池寛の青果宛て書簡を手がかりに大映の映画作品「国定忠治」（監督・松田定次、脚本・小川記正）をめぐるとらブルについて考察した。その後の調査から青果文庫には書簡の他にも青果の「国定忠次」に関する草稿資料類が数点残っていることが確認でき、これらもまた研究資料としての価値が高いものであることが確かめられた。

年七月）をはじめ、「真山青果文庫調査余録<sup>③</sup>」でも論じているので、ぜ

そこで本稿では昭和七（一九三二）年に歌舞伎座で上演された「国定忠次」に関する資料を検討することで、残された草稿類から読み取れる本文の変遷や青果の執筆方法について論じてみたい。

## 二、真山青果の描く「国定忠次」

国定忠治<sup>(1)</sup>と言えば周知の通り講談や浪曲、小説、映画の題材にもなった上州佐位郡の侠客である。特に『極付国定忠治』の「赤城の山も今夜をかぎり<sup>(2)</sup>」の科白で知られ、現在では巷間に広まったこの常套句によって忠治のイメージが固まってしまった印象があるが、青果の描く「国定忠次」は、尾崎秀樹氏の言うように従来とは「根本的にことなる忠次像をうち出している<sup>(3)</sup>」ところに特徴がある。青果はその義人としての一面を強く打ち出し、救済の背景にある内省的で思索的な忠次を描いた。

ではここで青果の戯曲「国定忠次」について、実際の舞台を見た加賀山直三氏が書いた梗概を引用する<sup>(7)</sup>。

天保八年のことである。国定村の忠次は父親の七回忌を盛大に営み、これを機にやくざ稼業から足を洗うと子分達に語る。やくざという嘘の毎日に我慢できず元の百姓に戻りたいというのだが、文蔵を除く子分達は、きき入れるわけがない。そこへ堅気時分の忠次の女房お豊が、仏様にお焼香を、と訪ねて来る。やくざにいや気がさしていた忠次は、再び一緒になろうと切り出すがお豊は、やくざがやめられる筈はないといわんばかりの、愛想づかしをいって去る。その言葉通り、その後も忠次は自分の影をひきずるように、国定一家を率いていく。この年、上州はうち続く飢饉に、百姓たちの生活は困窮の極に達していた。

それを何とか助けようと、忠次は八方手を尽くすが、そんな時、忠次が義賊だとの噂が立つ。それは自分の浅二郎が、金満家から盗んだ金を貧乏人に与えていたのだが、それを知った文蔵は、浅二郎を斬ろうとするが、その時、忠次の新しい女房お町をめぐる、伊三郎一家との出入りが起きる。実はそれは、忠次に対する百姓たちの絶大な人気を恐れた代官が、陰で糸を引いていると察した忠次は、とっさに己れの堅気心の分身である文蔵を殺して、やくざに徹しようと腹を決める。そしてお上の御用金を奪って百姓に与え、ために、赤城山へ逃げこまねばならなくなる。そんなある日、お豊が忠次に会いに山を登って来て、百姓たちのために、どこまでも逃げのびてくれと頼む。それに応えて、国定一家は勝鬨をあげ、赤城山を後にする。

次に初演について確認する。本作は昭和七年七月一日から二五日まで歌舞伎座の七月興行の第二部として上演された。この時は三幕六場で、主な配役は、忠次（市川左團次）、文蔵（市川壽美藏）、浅二郎（市川猿之助）、お町（市川松蔭）、田蔵（大谷友右衛門）、お豊（片岡我童）である。脚本は上演が始まってから雑誌『富士』に掲載された<sup>(8)</sup>。

もう少し内容に踏みこみながら作品を紹介する。第一幕のト書きに「忠次一人、悄然として腕を組み、深く瞑想に沈むもの、如く、脇息にもたれる」とあるように忠次は憂いに沈んだ様子で舞台上に登場する。第一幕の舞台である養寿寺の客殿は、その日の同時刻、本堂において父親の法事にかこつけて凶作に苦しむ近隣の庄屋や百姓衆をもてなす忠次一家

の賑わいとは対照的に、内輪の者だけが入ることを許された静かな場所（すなわち忠次の心的空間を表し、これは第二幕の田部井新宅も同様である）として描かれる。第三幕で腹心の子分である文蔵を自ら斬って無職者として生きることを決心するまでは、忠次は終始「腕組み」をし、今の自分を問い、深く内省し、やくざ者をやめて百姓に立ち返って生きようと思ひ悩む人物として描かれる。財産をすべて分け与え、田部井の仮宅に場を移した第二幕では、無職渡世としての生き方に徹してもらいたい子分の浅二郎と、土地の代官林部や侠客島の伊三郎と忠次の関係を見定めて親分が窮地に陥らないように計算する思慮深い文蔵の間で激しい対立が描かれるが、この三木の文蔵と武井の浅二郎はともに忠次の二つの内面を象徴し、『玄朴と長英』に代表される「性格的対位法」<sup>⑨</sup>がこの両者に具現されている。窮民を救うために江戸から下る救済金をなぜか生糸問屋が喜び、結局窮民には行き渡らない世の中のからくりを浅二郎の言葉によって知った忠次は、粕川磧（第三幕の前半）で、沈思し内省する「自分の弱さ」の象徴である文蔵を斬り、自身の葛藤を断ち切って無職渡世のやくざ者として生きることを決意する。続く第三幕の後半で御用金を奪い、さらに代官所を襲撃して貯蔵していた米穀を窮民に配った忠次たちは討手を逃れて赤城山に立てこもる。第四幕で忠次は討手との死を賭した決戦を覚悟するが、その夜に忠次のもとへ林部に毒酒を持たされたお豊が訪れる。元夫である忠次を殺す役目を負わされながらも何とか彼を生かそうとする叙情的な場面が描かれ、忠次が生きることを選択するという場面で終わるが、青果の忠次の特徴は第三幕の前半

までの内面描写にあると言えよう。

講談や浪曲ではわずかに触れられる程度で、さほど注目されてこなかった天保の大飢饉と忠次の窮民救済を描く本作の時代背景は、そのまま昭和七年の日本の状況と重ね合わされる。初演の劇評では「現〔在〕農村疲弊の声やかましき折柄これは真山氏独特の見地より描かれた時局問題劇と見られ俄然センセーションをまき起してゐる」<sup>⑩</sup>と高く評価しているもの、やや辛口に「農村救済の問題のやかましい時この芝居は實際の感もあるが只の際物とは訳の違ふ深みがある、たゞ、「切」ッはツツの忠次と農村救済を結びつけ、いやにインテリ忠次にしたのは、無条件で賛成出来かねるがたゞ姿を忠次に借りて、何事か云はんとする為と思へばそれでよい」<sup>⑪</sup>とする批評もあるが概ね評価は高い。多くの劇評が本作の持つ時代状況との対応に注目している。また同時代評ではないが、青果が当時共感していた社会主義への影響が見られることを指摘しているものも見受けられる<sup>⑫</sup>。

このように青果の「国定忠次」は天保の大飢饉と昭和七年の日本の時代状況を重ねるといふ同時代的な要素を積極的に取り入れながら、一方で青果劇らしい人物の配置とともに、今までになかった深慮する国定忠次とその心理的な葛藤を描いた作品と言うことができる。数多くの脚本を書いた真山青果の作品のなかでは代表作とまでは言えないものの、当時の社会が抱えている問題と青果らしさを兼ね備えたバランスの良い作品である。

そして本稿で検討する資料は、この「国定忠次」の本文の成立過程を

たどることができるものである。

### 三、「国定忠次」関連資料について

ここで眞山青果文庫が所蔵する「国定忠次」関係資料について紹介する<sup>②</sup>。当該資料は数種類残っているが、その多くは脚本の一部分である。そのなかでも全編が残っているのは原稿用紙にカーボンコピーで本文を写して製本したものである。以下、この資料を中心にそれぞれの資料について概要を記す。

#### ・【製本版】「函架番号029」<sup>①</sup>

本製本（灰色のクロス装・縦二三・五cm×横一六・五cm）、一冊。背表紙に金の箔押しで『戯曲／国定忠次 三幕 亭々居蔵』とある。本文は一六六丁。相馬屋製原稿用紙（20字×20行・赤格子）を用いるが、一六一丁から一六六丁までは「西鶴研究稿本 亭々居」の原稿用紙で代用する。本文はカーボンコピーによる複写である。なおカーボンコピーの清書は筆耕者が行っており、草稿の筆跡とは異なる。内容は第一幕から大詰までの全てを揃える。カーボンコピーの本文には多様な書き入れがある。使用された筆記具は、朱筆、墨筆、赤ペン、黒ペン、鉛筆、赤鉛筆、青鉛筆であるが、このうち初出『富士』に關係するメモ書きに赤鉛筆が使われており、書き入れ時期を考察する上で一つの手掛かりとなる。

本稿では仮にこれを【製本版】と名付ける（【製本版】については四節を参照）。次に【製本版】と同じ本文を持つ、カーボンコピーの資料を取りあげる。

#### ・【カーボンコピー資料】「函架番号068」

「国定忠次 前編（表題は朱筆書き）」と記されているもの。紙縫り綴じ。本文九一枚。相馬屋製原稿用紙にカーボンコピーをしたもので本文は【製本版】と同じ。内容は以下の通りである（綴じてある順番に①③と仮に稿者が整理した。以下同じ）。

①【第一幕】…五九丁。第一幕のすべて。書き入れがわずかにある。

②【第三幕】…一六丁。第三幕「その二」のすべて。書入れは、源造の科白「こ、は何処だ」（『眞山青果全集』八九頁<sup>③</sup>）の「一カ所のみ」。

③【第三幕】…一六丁。第三幕「その二」のすべて。②と同じ本文だが③には書入れが多数あり、修正箇所から『富士』掲載のために修正されたものと思われる。

#### ・【直筆資料Ⅰ】「函架番号068」

「国定忠次 四幕」直筆原稿。横書き事務用箋（用紙にSUPER FINE KENT BONDの透かし入り）に縦書き。紙縫り綴じ。四一枚。うち最後の2枚は別作品の原稿で、綴じられていない。本文は鉛筆書き。用紙一枚目の右肩に「国定忠次 四幕」と青鉛筆で記す。内容は以下の通りである。

①「第一幕」…「その二」を青鉛筆で消し「第一幕」と記す。

①「第一幕」の(A)…冒頭「時は前場より」(『全集』九頁の冒頭にあたる部分)、「貫木の一つも預けられるやうになつてからだ」(『全集』三四頁)。ただし脱けている箇所がある。<sup>(16)</sup>

①「第一幕」の(B)…用紙右肩に「四十一枚より」と赤鉛筆で記される。内容は円蔵の「(酒樽に腰掛けて) 忠次どん、今日のお談義は」(『全集』三五頁)、「三カ所目の忠次の「何——」」(『全集』四一頁)まで。

①「第一幕」の(C)…用紙右肩に「五十三より」と朱筆で記される。内容は浅二郎の「金を撒き散らしてやるぞ。」(『全集』四二頁)「第一幕の末尾」(『全集』四六頁)まで。

②「第二幕」

②「第二幕」の(A)…冒頭「時は前幕より二十日ほど過ぎて」(『全集』四六頁)「浅二郎の「そいつは強気だなあ」の直後のト書き」笑ひながら台所の方へ行く」(『全集』五四頁)まで。

②「第二幕」の(B)…用紙右肩に「十五枚より」と赤鉛筆で記される。(A)と一部重複し、それに続く場面。文蔵の「(ギョツとして浅二を見る)」(『全集』五四頁)「文蔵の「何——?」」(『全集』五七頁)、『全集』にはない浅二郎の「何んだ!」を受けて二人がにらみ合う所まで。なお、この部分で事務用箋が裁断されている。

②「第二幕」の(C)…文蔵の「暫くして」武井の、「(『全集』五八頁の文蔵の「これ! (仰天して、高声を制し) 武井の、」に

あたる部分)「文蔵の「用は済んだ、燃してしまへ」」(『全集』五九頁の浅二郎の「何——?」にあたる部分)まで。

②「第二幕」の(D)…(C)と一部重複し、それに続く場面。浅二郎の「ヒヤリとしたぜえ、は、は、は、」(『全集』五六頁)にあたる部分「ト書きの「混雑して明かならず。」」(『全集』六二頁のト書きの村人等の「また混雑する」にあたる部分)まで。なお、浅二郎の「臆病者! 卑怯者!」のところで用紙が裁断され、次の紙に文蔵の「武井の、お前は」が続く。

②「第二幕」の(E)…用紙右肩に「二七より書直し」と赤鉛筆で記される。(D)と一部重複し、それに続く場面。與七の「いえく」にはじまる科白の「しは一昨日の晩——」(『全集』六一頁)「ト書き」お町、対話を立聞きしたる心持にて出て来る。」(『全集』六九頁)まで。

③「統国定忠次」

綴じられていない二枚は「統国定忠次」の「第三幕 その三」の草稿である。一枚目が忠次の「それく、それが厭でござります。」(『全集』二二三頁)「浅二郎の「やつぱりおれの産土神様だ。」」(『全集』二二三頁)まで。二枚目が忠次の「大手を振つて、帰りたくありません。」(『全集』二二三頁)「末尾」(『全集』二二四頁)までである。

・「直筆資料Ⅱ」「函架番号068」

「国定忠次 第二幕の中」直筆原稿。亭々居稿本の原稿用紙、紙縫り

綴じ。八枚。本文の筆記具はペン。用紙一枚目の右肩に「国定忠次 第二幕の中」と青鉛筆で記す。内容は、お町の「筋違ひの喧嘩——？」（『全集』七〇頁）〜浅二郎の「誰だ、お前は。」（『全集』七八頁）まで。

・【直筆資料Ⅲ】「函架番号 068」

「国定忠次 大詰」直筆原稿。亭々居稿本の原稿用紙、紙縫り綴じ。二四枚。ペン書。用紙一枚目の右肩に「国定忠次」、その下に「大詰」と青鉛筆で記す。内容は以下の通りである。

- ①【大詰(その二)】…「その二」の冒頭（『全集』一〇五頁）〜「お豊、ニツコリして倒れる。」（『全集』一一五頁）まで。なお、『全集』一一四頁の「うむ、生きよう！」にあたる部分で一度途切れ、続く一一五頁の部分が次の原稿用紙に断片的に書かれている。

- ②【大詰(その一)】…原稿用紙右肩に赤鉛筆で「五枚より書直し」と記す。「この対話のうち石を集めて」（『全集』九六頁）〜利喜松の「よし来た！（幕）」（『全集』一〇四頁）まで。

- ③【大詰(その二)】…原稿用紙右肩にペンで「（十二枚より書直し）」とある。お豊の「死んで行つた人は」にはじまる「寅次を……懐かしいとは思ひませんか。」（『全集』一一二頁）〜「忠次カラ〜と笑つて（幕）」（『全集』一一六頁）まで。

現在確認できるものを整理した。これらは大きく「直筆の草稿類」、「カーボンコピー本文」、そしてこれに「加筆・修正したもの」に分けら

れる。これらの資料を比較することで様々な執筆段階の本文の変遷を追うことができるが、本稿ではこれらのうち【直筆資料】からカーボンコピーの本文までの過程をたどることを試みる<sup>⑭</sup>。まずはその前提として【製本版】の位置づけとその特色について検討する。

四．「国定忠次」関係資料から分かること（１）——昭和七年初演時の痕跡を残す【製本版】

真山青果の「国定忠次」は『全集』（第五卷）にあるように現在では「四幕六場」で知られるが、初演時の場割は「三幕六場」であったことが当時の劇評に記されている<sup>⑮</sup>。また次の図1は昭和七年の『時事新報』に掲載された歌舞伎座の広告であるが、確かに「三幕六場」とある。



図1 歌舞伎座広告

ここで注目すべきは、カーボンコピーの本文に加筆された【製本版】は「三幕六場」の構成となっているという点である。<sup>20)</sup> 初演については『都新聞』に「歌舞伎座 第二部「国定忠次」の場割」という記事が掲載されており、個々の場面は分かるのだが、どの場面が何幕にあたるのかまでは記載されていない。そこでこの記事を手がかりに【製本版】の幕割りを対応させると次のようになる。

【製本版】「国定忠次」(三幕六場)

〔第一幕〕

・ 国定村養寿寺客殿

〔第二幕〕

・ その一 田部井新宅 ためがい

・ その二 粕川磧

・ その三 大間々街道

〔大詰〕

・ その一 赤城山湯沢付近

・ その二 赤城神社々前

参考までに『全集』版も掲げておく。

『全集』版「国定忠次」(四幕六場)

〔第一幕〕

・ 国定村養寿寺客殿

〔第二幕〕

・ 田部井新宅

〔第三幕〕

・ その一 粕川磧

・ その二 大間々街道

〔第四幕〕

・ その一 赤城山湯沢付近

・ その二 赤城神社々前

なお幕の構成は大きく変わっているが、内容そのものに大きな変更はない。では、一体いつ変更が行われたのだろうか。

ここで『真山青果戯曲上演舞台写真集』<sup>22)</sup> 所載の上演年表を参照する。昭和七年七月一日から二五日まで歌舞伎座で上演された初演には「三幕六場」の記載があるが、翌昭和八年一月、京都座「新訊／国定忠次」では「四幕六場」に変更されている。同年の二月には大阪の浪花座でも「国定忠次」が上演されているが、これも「四幕六場」である。

初演の歌舞伎座と京都座の公演の間には『富士』の掲載がある。そこで初出の『富士』を確認すると、「粕川磧」の場が「第三幕」と記載されており、これを機に場面構成が変わったと推定される。<sup>23)</sup> なお【製本版】の資料には『富士』に関連する書き入れが「七月九日」の日付とともに残っていることから、初演が始まってから修正が行われたと考えられる(第五節の(3)を参照)。以上を踏まえると、この「三幕六場」の痕跡

を残す【製本版】は、「国定忠次」の初演時の脚本に非常に近いということが出来る。ここで「初演時の脚本に非常に近い」というやや歯切れの悪い書き方にならざるを得ないのは、【製本版】のある一部の加筆箇所を踏まえればという条件が付くのであって、特にカーボンコピーの本文の段階では「初演時の脚本」とは言えない部分を含んでいるからに他ならない。複雑な問題を含む本文ではあるが、次節から具体的に草稿を検討する。

## 五. 「国定忠次」関係資料から分かること(2)——草稿から【製本版】の本文へ

ここからは第三節で整理した資料を手がかりに草稿段階から【製本版】のカーボンコピーの本文へと移り変わっていく過程を追っていく。具体的には草稿資料が確認できる「第一幕」と「第二幕」そして「大話」を検討する。すでに全体のあらすじは示してあるが、細かい本文の引用が続くので、各幕のどの部分が対応するのかわかるように各幕の梗概も記す。

それでは以下、資料の本文を検討するが、その前に引用に関する簡単な凡例を記しておく。

### 凡例

- ・句読点、濁点は資料の原文に従う。

- ・資料のなかの旧字や崩し字は通行の字体で表記する。
- ・引用に際し、本文を途中で省略する場合は「…」と表記する。
- ・資料の削除部分の表記——角括弧に丸ゴシック、削除線を引く(十丸ゴシック)
- ・資料の加筆部分の表記——山括弧にゴシック(〱ゴシック)
- ・判読できない抹消部分の表記——一文字につき■を一つ記す。
- ・判読できない文字の表記——一文字につき□を一つ記す。

### 五―(1) 第一幕の改稿過程

#### 「第一幕」国定村養寿寺客殿

舞台は忠次の菩提寺である国定村養寿寺客殿。父の七回忌の法事に招かれた庄屋や百姓達が本堂で忠次の子分に歓待されているが、子分たちは忠次の指示に従ってはいないもの、内心この行為に不服を抱いている。そこに忠次の父の法事と聞いて急いで来た内縁のお町と、忠次と呼ばれていた元の妻お豊とが出会い、二人の間で小さい諍いが起きる。そしてこの催しの噂を聞きつけた土地の代官林部が養寿寺を訪問して忠次の行いを褒め、陣屋の仕事を手伝わないかとすすめるが忠次はこれを辞退する。散会後に子分を集めた場で忠次はお豊と復縁し百姓に戻る決意を伝えようとしますが、日光の円蔵をはじめ子分らに止められ、果てはお豊からも突っぱねられる。

#### 「第一幕」の検討で用いる資料



【直筆資料Ⅰ】のなかの「第一幕」の草稿①(A)・(C)、および【製本版】の本文を用いる。冒頭が「その二」から始まっており、これが全体に関わる大きな問題となるが、それ以外の修正箇所も多くは、細かい表現の直しである。

【直筆資料Ⅰ】①と【製本版】を照らしあわせると、両者は一致する部分が極めて多く、カーボンコピーによる清書のための原本ではないかと思われる。それでは具体的な検討をはじめ。

まずは【直筆資料Ⅰ】①(A)「第一幕」の冒頭を取り上げる。草稿段階では「その二」とされている部分が「第一幕」のはじめとなる。

引用1 【直筆資料Ⅰ】①(A)…【全集】九頁)

その二十(第一幕)

時は前場より五六日を過ぎたる日。梅雨晴れの日の午後より夜にかゝる。処は上州佐位郡国定村養寿寺の客殿の一部。養寿寺は国定村無宿忠次の菩提寺なり。

舞台に見ゆるところは、郷村の寺院としては不相応と思はる、書院造の宏壮たる建築にて、広間二室を打通したる客殿を内部より見る。広間の上手には広き板敷の廊下ありて鍵の手に屈折し、それを奥に入れば方丈及び内玄関に通じ、それを上手に歩めば本堂に通ずる。廊下の奥はさ、やかなる植込なり。

引用中にある空白の一行は、資料の表記に従っている。冒頭は『全集』

の本文では「時は天保八年六月の下旬。梅雨晴れの日の午後より夜にかゝる。処は上州佐位郡国定村養寿寺の客殿の一部。」と記されている箇所である。

さて、この①(A)の修正箇所から分かることは、現在の「国定忠次」の冒頭は、おそらく「第一幕」の「その二」として考案されていたものであるということだ。ここを踏まえながら、次に【製本版】の冒頭とその加筆箇所を参照しつつこの部分の考察を進める。

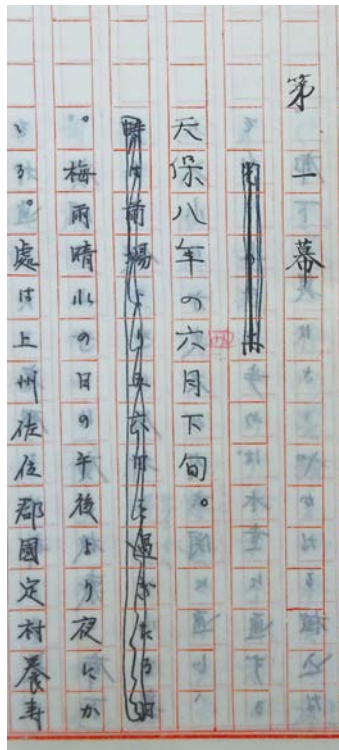


図2 【製本版】の冒頭

抹消部分が若干見づらいが【製本版】の本文は【直筆資料Ⅰ】①(A)とほぼ同じものであり、カーボンコピーの本文も「その二」からはじまっている。ただし【製本版】は冒頭の「その二」を消して墨筆で「第一幕」と記し、続く冒頭の「時は前場より五六日を過ぎたる日」を削除して黒ペンで「天保八年の六月下旬。」と加筆している。さらにこの「六月」の「六」の右側に赤鉛筆で「四」と記されている。なお『全集』版、初出ともに「六

月」となっており、この「四」は反映されなかったことがわかる。

ところで前節で【製本版】の本文に修正が加わったものが初演の脚本に近いと説明したが、冒頭にこのような大きな修正が行われており、カーボンコピーの本文自体が途中から始まっていることを踏まえると、本当にこの部分から上演されていたのだろうかという疑いを抱くこともあるのではないか。念のために初演に関する資料を補うことでこの疑問を解決しておけば、先に引用した『都新聞』の場割りや「国定村養寿寺客殿」ではじまっていること、また初演を見た伊原青々園が「序幕が開くと左團次の忠次が床脇に坐つて居る」と記していることから、初演は間違いなくこの場面から始まっており、どこかの段階で外された「その一」が差し戻されて上演されたという記録はない。

以上を踏まえたいうえで議論を戻せば、第一幕の「国定村養寿寺客殿」の場は当初は「その二」、つまり二場目であり、その前に「その一」が構想されていたということである。「その一」がいかなるものだったかは現時点では想像するしかないが、場面については「五六日を過ぎたる日」が手がかりになり、第一幕の内容も併せれば、「その一」の空白部分を推測することはさほど難しくないように思われる。おそらく「その一」に構想されていたのは天保の大飢饉として知られる大凶作のために引き起こされた百姓衆の疲弊した惨状であり、そこに忠次を登場させるとすれば、この窮状を見ながら往時と現在の自分を振り返り、彼らの富を掠めて生きている自分を内省する様子ではないか。なぜなら第一幕はその忠次、父の法事を口実に自らの家財を擲って庄屋や百姓に施し、

無職者をやめて百姓に戻ると子分に伝えようとするところが描かれているからである。なお初出には次のような部分がト書きとして補われている。

この歳は関東関西日本全国にわたれる大凶作にて、米価騰貴して四民飢渴に苦しむと共に、繭生糸の生産物は市場価格暴落して、農村の疲弊は、その極度に達し、既に今春二月には大塩平八郎の暴挙ありたる程なり。

（真山青果「戯曲／国定忠次」『富士』第五卷第八号、昭和七年八月）

まさにこれが外された「その一」の背景となる部分であろう。

実際に公演された「国定忠次」の第一幕の冒頭では、忠次が目にした窮状については描かれず、またそれを見て父の法事にかこつけて彼らを救済しようと思ひ立ち、行動に移すまでの経緯も省いて、養寿寺で窮民をもてなす場面からこの物語ははじまる。「その二」という表記を念頭に置いて改めて「第一幕」を読みなおすと確かに出来事の順序からすれば行動から描いているのであって、理由となる部分は空白になるが、むしろ「国定忠次」の冒頭ではこの空白が極めて効果的に用いられていることに気づく。

本堂での賑やかな様子とともに、上演開始早々悄然と腕を組んだ「左團次の忠次が床脇に坐つてゐる」のを見た観客は、そこに切った張ったの世界とは全く別の忠次がいることに驚いたのではなからうか。同時に

忠次がなぜ悄然と座っているのか、その背景に引きつけられたに違いない。このような従来のイメージを裏切る忠次の姿とその空白は、新しい忠次像を印象づける大きな要素となる。この冒頭は出来事を逆に描くことで、観客の注意を集める効果を生み出しているのである。

まずは①(A)の冒頭に見られる重要な修正箇所を細かく検討したが、すでに述べたように【直筆資料I】の①(A)と①(C)は、残された草稿資料とカーボンコピーの本文との変化が少ない。したがって全体の内容には影響しない表現面での細かい修正が多いのだが、第二幕以降は主に執筆方法に関する問題を検討し、細かい表現については多くは検討できないので、やや煩瑣ではあるが修正箇所が具体的に分かる例をいくつかここで摘記してみたい。

まずは最初のト書きの修正箇所を見てみる。

引用2【直筆資料I】①(A)…『全集』一三頁

本堂前の高檜にては近傍の窮民を賑はすべし、子分等の手にて、蒔餅の報謝を初めたるもの、如く、餅を奪ひ合ふ老弱男女の声耳を聳するばかりに聞ゆる。

忠次(本名忠次郎)、この時三十六歳なり。その風貌は譚海の著者(学海先生)「の本心」が、「忠次肥えて白く〔…〕酒を嗜みて多く飲まず」と書きたる如く、俠客としての威厳のおのづから具る男なり。

引用は修正が集中している部分だが、これより以前は「供養法会」の「供

養」を消してまた「供養」と書いているところがあぶりである。その後もほとんど修正はない。では次に最初の科白のところを引用する。

引用3【直筆資料I】①(A)…『全集』一三頁

文蔵 親分へ。笹川の親分から使をもつて、遅りましたが、御野菜料がとぎました。(香奠を出す)

忠次 (目を開き)痛入つたことだ。使の衆によく手当をしてくれ。

文蔵 へえ。そして、本堂の御「密」衆には何う致しませう。

まだ引出物をくばるには早うござんすか。

忠次 酒は何うだ。充分に廻つた様子か。

文蔵 (本堂を指差し) あの通りでございます。〔…〕

本文を修正する際に「賑はすべし、子分等の手にて」のように削除した最後の一文から書き始めるという傾向が認められる。

なお、文蔵の最初の科白の「とぎました」はカーボンコピーでは「とぎました」と直されている。筆耕者による修正ではないかと思われる。

引用4【直筆資料I】①(A)…『全集』一三頁～一四頁

忠次 気持よく飲んでもらふのが何よりの供養だ……。〔嘆息して腕組〕

文蔵 親分。そしてお前さん、お席には……。

忠次 少し斯うして置いてくれ。考へたいことがあるんだ。

次の修正箇所は、浅二郎が無神経に繰り返す「施行」という言葉をめ

ぐって、彼の言葉づかいに滲み出た「施してやっている」という態度を忠次が諫め、それに浅二郎が反論するという展開に繋がるきっかけとなる場面である。

引用5 【直筆資料I】① (A) ……【全集】一四頁

浅二 (本堂の方に叫ぶ) おうい八寸はすの兄イ、神崎の、みな手をかしてくれ。〔…〕小前小作の貧窮乏組に「くばつて」施行して、この二両包は中通りのお百姓衆、こちらの反物は家持町人衆の旦那がたの方へ引くんですね。

この後で浅二郎は「さアさ、施行だ〜。」と連呼するのだが、その発言の前の「くばつて」を「施行」とすることで、忠次の「施行とは、何の口だ!」という科白を導く布石としている。次はお町が今日の法事を前もって教えてくれなかった忠次にその訳を問いただす場面である。

引用6 【直筆資料I】① (A) ……【全集】一九頁

お町 これほどの御供養をなさるんなら、なぜあたしにもお線香を手向けさして下さらない「のへんだ」。親分、たんと然うなさるがい、よ。

忠次 今日の仏事は、「お札」(忠次)一人の「こと」(志)だ。世間様「に」(に)吹聴する「こと」(やうな……事)ぢやねえ。が、それにしても、何うしてお前は……。

お町 日光の兄さんから態々人をうけて、慌て、飛んで来ましたよ。

忠次 円蔵どんが「お前」に「使を立て〜」——? (ピリ、と眉を動かし、腕を組む) 然うか……。

お町 親分、あたしにだつて顔があるよ。今日のこの事を知らずにゐたら、あたしや朋輩どもの手前「も」(にも)、伊勢崎の土地にや居られない身になるんだよ。

忠次 いや、そんな訳ぢやね「え」(え……)、は、は、は、。

「おれ一人のことだ」を「忠次一人の志だ」と具体的に説明している。「世間様に吹聴することぢやねえ」という気持ち重視すれば、むしろ修正前の表現のほうが自然だが、このように修正することで義人としての側面を強調していると思われる。

なお、二つ目のお町の科白「人」に付けられた「うと」の振り仮名はカーボンコピーの本文でも引き継がれている。

次は代官林部の突然の訪問を忠次が一度断り、客殿に庄屋や百姓衆の主だった者たちが忠次に本日の御礼の挨拶に来る場面である。

引用7 【直筆資料I】① (A) ……【全集】二〇頁

忠次 (思案して) 御覧の通り、だらしもなく立込んで居ります。

明日(改めて) 忠次の方から、(板鼻) 御陣屋まで罷り出でますと、丁寧に「申上げて」お断り申上げてくれ。

利喜松 それで、好しうござりませうか……?

忠次 御役人様の御出張などあつては、(本堂を示し) お百姓衆の

酒が醒める。今日だけは何うか、お通り流しに願ひますと、  
申上げてくれ。

これに続く場面における、挨拶に来た庄屋や百姓たちに応じる忠次の言葉づかいも「だ」から「です」へ修正される。引用6の「忠次の志」を中心に細かい部分が直されていく。

引用8【直筆資料Ⅰ】①(A)…『全集』二二二頁

忠次 (迷惑しながら)これ、これ、何を仰しやるん中(中)へです。は、は、。忠次は御覽の通りのやくざ渡世、(中)(中)頃(頃)な様御百姓だちの掠(な)りをうけて生きてゐる身でござります。そのやうに大業に御礼を仰しやられると、腋窩が冷たくなります。何うかまあ、お手をお上げ下さいまし。

庄屋たちに対する忠次の言葉づかいがより丁寧に改められている。

引用9【直筆資料Ⅰ】①(A)…『全集』二五二―二六頁

忠次 (顔を上げ)先づ第二に、只今の御懇命、御陣屋御用の一条は、キツパリとお断り申上げます。

林部 何——？

忠次 明日になれば知れますこと——、忠次は今、一生大事の「心中(中)」(……)行状(状)」の切換時(時)になつて居ります。人の上(上)に立つて、人を取統(とりす)ぶることは厭(いと)でござります。百姓と共に、苦しみた

う存じます。

林部 と云ふは——？

忠次 何事も、明日の忠次を御覧願ひたう存じます。

林部 何か、深い決心があるやうだ。では、その事は……問ふまい。が、今その方の言葉のうちに、身としては聞捨てがたき一語があつたぞ。

忠次 百姓に対して、恐(おそ)しいお心持が潜(ひそ)んでゐるやうに存じます  
中(中)へと——、申上げました一言(ひとこと)葉(は)でござりまするか。(……)

引用8の「お手をお上げ下さいまし」、引用9の「明日になれば知れますこと」のように【直筆資料】には濁点がない表記も多く、【製本版】におけるこれらの濁点の付与も筆耕者の判断で修正が行われていると考えられる。

次は法事の散会后、忠次が子分を集めて自分の考えを伝えようとする場面である。第一幕のなかで盛り上がりを見せはしめるところである。

引用10【直筆資料Ⅰ】①(A)…『全集』三一頁

忠次、悠然として上座になほる。下の子分二三人、百目蠟燭をともしたる燭台三四基を「座敷」へその前」に持ち来る。座敷中白昼のごとく明るくなる。

これに続く、忠次が自らの素性を述べる箇所には特に手が入っている。

引用11【直筆資料I】①(A)…『全集』三二一～三三頁)

忠次 第一に、聞いてもらひたいのは忠次の素性だ。お前たちは、遠くに聞いて知つてゐると云ふかも知れないが、それは大方間違だ。「…」この半纏はおれが十六の年、六千石の建場に立て、駄賃とりの馬方をした時の紀念の品だ。お袋が縫つた、この補綴の「縫申の十丹精」を「(ぶりを)」見ても……おれの家の困窮ぶりは、お前たちにも吞込めるだらう。「…」おれの身についてゐるものと云やア、たゞ三尺手拭が一筋と竹杖が一本と、たゞそれツきりの境涯だつたのだ。おれ「(が)」が「三文」賭博に手を出したのも、決して外に仔細は無え。たゞ貧しい腹に食いたかつたのだ。駄賃どりの上り下りに、並木の茶屋で打つ鯨の味噌煮、赤鯛の附焼、一皿十二文の店屋物を食ひたい欲が一心だつた……。

以上が①(A)の主な修正箇所であるが、以降①(B)と①(C)についても確認する。①(B)には大きな加筆部分(引用13)が一カ所あるが、その他は細かい表現が修正されているのみである。

引用12【直筆資料I】①(B)…『全集』三五～三六頁)

円蔵 (酒樽に腰掛けて) 忠次どん、今日のお談義は、大層芝居が、りだのう。

忠次 真面目な話だ。日光の、擲楯はないでくれ。

「…」

忠次 (むツとする怒「を」を強いて) 抑へて) 日光の、そんならお前に聞かう。お前はこの「無宿「やくざ」」渡世を、正しい稼業と思つてゐるのか。

円蔵 正しいか正しくないか、そんな事は知らねえ。が、まことに面白い商売たとは思つ「て」てゐる。

忠次 (ピリ、と鋭く、眉を動かし) 何処が面白いんだ!

円蔵 無理の通るところが面白い。

①(B)には「四十一枚より」という覚え書きがあるが、「(酒樽に腰掛けて)」の部分は赤鉛筆で下囲みがしてある。この囲みは四一枚目からという意味であろう。なお、最初の円蔵の科白の括弧の部分は初版【製本版】ともに「酒気を吐きつ、廊下の酒樽に腰掛け」と記されている。「(酒樽に腰掛けて)」とは異なるが、この前の部分を略記したのでらうと推測される。

次に①(B)で大きな加筆が行われている箇所を引用する。第一幕では、内縁のお町と前妻のお豊が火花を散らすところがあるが、二人のうちお豊の様子を描いたト書きの部分である。

引用13【直筆資料I】①(B)…『全集』三六～三七頁)

忠次 弱きを助け強気を挫くの、人に頼まれりや後に退かねえの「…」男とみて駈込まれ、ば凶状持でもかくまってやる

「――」、〔…〕親分顔して脳天気のうてんきに、のさばり返つて暮して来られたが、考へて見りや…恥入ることだ。

「この時、本堂の方より茶屋女お豊、用事ありて来かゝる。障子の外に立つて話を聞く。」

円蔵 は、は、。忠次どん、お前さんそれを理窟と思つて云つて  
るか。〔…〕

ト書きの追加箇所について説明すると、忠次と円蔵の科白は続いており、この行間に△印を付け、右の余白部分に追加箇所が記されている。ここまでは(B)の主な修正箇所である。

続いて①(C)も見ておく。こちらも修正箇所はわずかである。場面は円蔵、浅二郎をはじめとする腹心たちが忠次の意向に反撥するところであるが本文の内容には関わらない微細な修正が行われている。

引用14 【直筆資料I】①(C)〔…〕〔全集〕四二頁

円蔵 (起上らんとする忠次の前に塞り) どつこい、待つた。切る  
ならおれ「」を「」を、先<sup>レ</sup>に切つてくれ。

忠次 何――？

浅二 (窓際に立つて) そうれへ、撒くぞ！国定村の親分「」が、  
悪魔ッ払ひに撒く金だ。〔…〕

①(C)の本文はほぼ【製本版】と同一であり、修正箇所は少ない。

①(C)の修正箇所は他に一カ所ある。

引用15 【直筆資料I】①(C)〔…〕〔全集〕四四頁

お豊 忠次親分。お前さんは何か発心して、急にこの稼業の足を洗はふとか仰しやつてゐるやうだが、帰れは昔の水呑百姓に、帰れる自分だと思つておいでなさるのかい。〔…〕お百姓衆の難渋は、そりや見るにも見かねることだが…お前さん「」が「一人」昔の貧乏人にかへつたとて、村の何の人の懐合が楽になるんです。〔…〕

以上が【直筆資料I】①の主要な修正箇所である。

【直筆資料I】は第三節でも整理したように鉛筆を使って事務用箋に書いている。そのため、資料をよく見ると消しゴムを使用したような煤けた箇所もいくつか見られる。したがって現在でもその修正箇所をたどれるものは【直筆資料I】の本文が作り上げられる過程のなかで生まれた様々な表現の試行錯誤のなかのあくまでも一部であるということには押さえておかななくてはならないだろう。

また【直筆資料I】は、本文の量に比べて修正箇所が少ないうえに、細かいニュアンスを直したものが多く見られる。繰り返して述べたこととはあるが、それだけこの時点における完成度の高さを証していると言えるだろう。続く第二幕では、物語の展開に関わる本文の変遷を比較しながら検討する。

## ・「第二幕」 田部井新宅

田部井の新宅に移った忠次は、代官所への出入りをはじめ、貧民救済のために動く。忠次の兄弟分の日光の円蔵はこの忠次のやりかたが気に入らず、体の不調を訴えて隠居しようとする。そこに百姓衆が現れて、謎の金銭が放り込まれた礼を言いに来る。文蔵とお町はいぶかしく思い、浅二郎は知らぬふりをする。どうやら浅二郎が怪しいと察した文蔵は探りをいれ、彼が忠次の男を上げるために自分を引き連れて内密に強盗を働いているということを知り、百姓衆に信頼されている忠次を本音ではうるさく思う代官が親分を捕まえる口実を逆にするばかりだと怒り、二人は激しく対立する。そこに三室の遊び人佐与松がやってきて、お町の処遇をめぐって島の伊三郎が因縁を付けていること、忠次の周囲をめぐる妙な噂に気をつけると伝えて去る。やがて伊三郎一家が粕川の境界を越えて押し込んでくるという噂を聞いた忠次が今はそれどころではないと伊三郎の元にやめるように交渉に行き、一方円蔵は子供を連れて伊三郎の一味を迎え撃つため、粕川の磯に向く。

## ・「第二幕」の検討で用いる資料

【直筆資料Ⅰ】のなかの「第二幕」の草稿②(A)～(E)、および【直筆資料Ⅱ】、【製本版】の本文を用いる。直筆資料は豊富に残っており第二幕の多くの部分を含んでいるが一部を欠く。欠落部分は、お町の「(ツ)ンとして煙管を引き寄せ」三木の兄さん。」(『全集』六九頁)から、お

町の「筋違ひの喧嘩——?」(『全集』七〇頁)の前まで(原稿用紙二枚分)。百姓源作が登場してから(『全集』七八頁)、第二幕の最後まで(原稿用紙四枚分)である。

「第二幕」の草稿類が非常に興味深いのは、青果の執筆過程を追うことが出来るからである。かなりのボリュームがある「第二幕」を書くに際し、青果はある一定の長さの場面を書いた後で一度筆を止め、その少し前の所から再び書き出して先を進めていく。こうしてある場面を糊代のように重ね合わせながら、長編の脚本を作りあげていくという作劇の方法を見て取れるのである。

次に各資料の特徴を記す。②(A)～(E)は①と同じ事務用箋を用いており、第一幕と同様に加筆や修正は少なく、【製本版】の本文との一致度は高い。草稿中、場面が重複する箇所の前案は、清書となる前の別バージョンとなっている。【直筆資料Ⅱ】は亭々居稿本の原稿用紙であるがこちらは【直筆資料Ⅰ】よりも抹消部分が多く字もやや乱れている。

抹消や修正は細かい表記の直しが多いが、本稿では残されている資料の特性を生かして物語の展開に関する点、具体的には場面が重ね合わされる部分を中心に、どのように本文が変遷していったのか、その過程をたどってみたい。

最初に引用するのは文蔵と円蔵が、近ごろ近隣の裕福な物持ちを狙った強盗が頻発していると話題にしているところに浅二郎が登場して、会話に加わる場面である。【製本版】の本文から分岐する、すなわち糊代



となった箇所である。

引用16 【直筆資料Ⅰ】② (A) …『全集』五四頁

文蔵 (不快さうな表情) あ、お前それに、聞いてゐたのか——。

(凝<sup>じ</sup>いつと浅二郎を睨む)

浅二 代官所が又、何をしてゐやがるんだ。「ふて実<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>太<sup>た</sup>え<sup>え</sup>け<sup>け</sup>だもの  
だなあ、は、は、は、。

文蔵 然うよ。実に太えけだものだ！(声を励<sup>あ</sup>めていふ)

浅二 そして、百姓衆の間では何んな評判だ。

文蔵 うむ、百姓衆は、ひどくその強盗を賞めてゐるさうだ。

浅二 そいつは強<sup>こ</sup>気<sup>き</sup>だなあ、盗<sup>と</sup>み<sup>み</sup>をし<sup>し</sup>たり、賞<sup>あ</sup>め<sup>め</sup>られ<sup>れ</sup>たり、こんな  
旨<sup>あ</sup>め<sup>め</sup>話<sup>わ</sup>はある<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>めえ。は、は、は、。ど<sup>ど</sup>れ<sup>れ</sup>、顔<sup>か</sup>でも洗<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>て来<sup>こ</sup>やう。

浅二郎、文蔵を尻<sup>し</sup>目<sup>め</sup>にかけて、笑<sup>わ</sup>ひ<sup>ひ</sup>ながら台<sup>たい</sup>所<sup>じょ</sup>の方<sup>かた</sup>へ行<sup>い</sup>く。

浅二郎が突然現れて、話題の強盗とはもしや、この男の仕業ではないかと文蔵が怪しく思い、浅二郎は思わせぶりに素知らぬ顔をする。この箇所は最終的に② (B) では次のように書き直されて【製本版】の本文になる。

引用17 【直筆資料Ⅰ】② (B) …『全集』五四頁

文蔵 (ギョツとして浅二を見る) あ、お前——、そこに聞いてゐ

たのか。

浅二 聞いてゐては可<sup>い</sup>け<sup>な</sup>かつた<sup>か</sup>い。引<sup>ひ</sup>込<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>か。

文蔵 何——？(口尻<sup>くし</sup>を吃<sup>く</sup>と囁<sup>ささ</sup>んで、凝<sup>じ</sup>いつと浅二を睨<sup>に</sup>む)

浅二 代官所も又、何をしてゐやがるんだな、そんな太<sup>ふ</sup>い<sup>い</sup>十<sup>じ</sup>へ<sup>え</sup>けだものを、何んとかならねえのかい。

文蔵 (同じ姿勢、涙に語尾を顫<sup>ふる</sup>はしつ、) うん、実に太<sup>ふ</sup>え……けだものなのだ。

浅二 で、村方<sup>むらかた</sup>ぢや何んと云<sup>い</sup>つてる。百姓<sup>ひやくしやう</sup>どもの評判<sup>へいぱん</sup>はよ。

文蔵 日増<sup>ひぞ</sup>憎<sup>にく</sup>んでゐる質<sup>しつ</sup>屋<sup>や</sup>米<sup>こめ</sup>屋<sup>や</sup>を荒<sup>あ</sup>さ<sup>さ</sup>れる<sup>る</sup>んだ。中には、小<sup>こ</sup>気<sup>き</sup>味<sup>み</sup>よく思<sup>おも</sup>ふ者<sup>もの</sup>もある<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>だらう。

浅二 そいつは強<sup>こ</sup>気<sup>き</sup>だなあ、は、は、は、。盗<sup>と</sup>み<sup>み</sup>をし<sup>し</sup>たり褒<sup>ほ</sup>め<sup>め</sup>られ<sup>れ</sup>たり、こんな旨<sup>あ</sup>め<sup>め</sup>話<sup>わ</sup>はある<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>めえ、世<sup>よ</sup>並<sup>な</sup>が変<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>て来<sup>こ</sup>ると、物<sup>もの</sup>事<sup>ごと</sup>があべこべだ。は、は、は、。ど、顔<sup>か</sup>を洗<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>て来<sup>こ</sup>やう。

浅二、台<sup>たい</sup>所<sup>じょ</sup>の方<sup>かた</sup>へ笑<sup>わ</sup>ひ<sup>ひ</sup>ながら立<sup>た</sup>つ<sup>つ</sup>て行<sup>い</sup>く。文蔵、凝<sup>じ</sup>いつとその後姿<sup>ごのちすがた</sup>を睨<sup>に</sup>む。

この時、奥<sup>おく</sup>の間<sup>ま</sup>よりお町<sup>おまち</sup>の声<sup>こゑ</sup>にて円蔵<sup>えんざう</sup>を呼<sup>よ</sup>ぶ。酒<sup>さけ</sup>食<sup>く</sup>の用<sup>もち</sup>意<sup>い</sup>出<sup>で</sup>来<sup>こ</sup>たるなり。

文蔵が浅二郎を疑<sup>う</sup>っている様<sup>よう</sup>子は変<sup>か</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>ないが、② (B) の引用17では引用16よりも文蔵の感情<sup>かんじ</sup>が多く書<sup>か</sup>き込<sup>こ</sup>ま<sup>ま</sup>れ、感情<sup>かんじ</sup>の揺<sup>ゆ</sup>れ動<sup>どう</sup>き<sup>き</sup>がさらに大きくなると同時に、それを内に抱<sup>かか</sup>え込<sup>こ</sup>む様<sup>よう</sup>子<sup>こ</sup>(口<sup>く</sup>尻<sup>し</sup>を吃<sup>く</sup>と囁<sup>ささ</sup>んで、凝<sup>じ</sup>いつと浅二を睨<sup>に</sup>む)も描<sup>え</sup>かれて<sup>て</sup>いる。

浅二郎と文蔵が腹<sup>はら</sup>を探<sup>たづ</sup>ね<sup>ね</sup>合<sup>あ</sup>うところは第二幕<sup>だいにまく</sup>のなかでも緊<sup>きん</sup>迫<sup>ぱく</sup>感<sup>かん</sup>のある重要な箇所<sup>じゆうじやうなかんじょ</sup>であるが、ここはかなり念<sup>ねん</sup>入<sup>り</sup>りに書<sup>か</sup>き換<sup>か</sup>え<sup>え</sup>られており、別<sup>べつ</sup>パ

ジョンが生じている。次は②(B)と(D)を比較してみたい。浅二郎が夜盗を働く道ので突然竹鎗に襲われて、反射的に斬り払ったその切れ端を文蔵に見せる場面である。ここも【製本版】の本文から外れて別バージョンとなっている箇所を引用する。浅二郎の「うむ、その藪よ。鹿田から間野谷に出るあの畔路の竹藪だ」から始まる長い科白の「ヒヤリとしたぜえ、は、は、は、」に続く科白である。

引用18【直筆資料I】②(B)・・『全集』五六頁

文蔵 そいつは危ねえことだつた。は、は、は、。そして、何日のことだ。

浅二 一昨日の晩よ。鹿田村の質屋吉田屋へ強盗の這入つたあの晩よ。時は四ツ過ぎ、いやに薄曇りやがつたその晩よ。

文蔵 そしてその向臈をねらはれたのは誰なのだ。

浅二 鎗の切りツ端は、おれの手にあるんだ。仁にんを尋ねるまでもあるめえ。

文蔵 お前また何んでそんな時刻に、あんな処を歩いてみたんだ。

浅二 その前に「聞きてえの」(おれ)は、何んで又その時刻に、先廻りして藪のなかに、卑怯に待伏せをかけやがつたか、おおアアそれが聞きてえ。

文蔵 何——？

浅二 何んだ！

文蔵、脇差の鐔に拇指をかける。浅二郎、身構へして鋭く相手を

睨みつくる。

それでは次に②(D)における文蔵の科白「そいつは危ねえことだつた。」から書き直された【製本版】の本文になる部分を引用する。

引用19【直筆資料I】②(D)・・『全集』五六頁

文蔵 そいつは危ねえことだつた。そしてそれは何日のことだ。

浅二 何日のこと？(ジロリと見返し)一昨日の晩よ。鹿田村の質屋吉田屋へ強盗の這入つたあの晩のことよ。時は四ツ過ぎ、あめちよ雨催ひの、いやに薄ツ曇つた晩だつたよ。

文蔵 そして、その向臈をねらはれたと云ふは、誰なのだ。

浅二 鎗の切ツ端きれがおれの手にあるんだ。仁を尋ねる迄もあるめえ。は、は、は、。

文蔵 然うかい……。 (悲しさうに俯向きつ、) お前また何んだつてそんな時刻に、用もない……。あんな処を歩いてみたんだ。

浅二 おれの方ちや、何んで又そんな時刻に、先廻りしてあの藪のなかに待伏せしやがつたか、その卑怯者の料簡が聞きてえ。

文蔵 何——？

浅二 意趣があるなら、なぜ真面まおもに来ねえ。闇にかくれて長い物を突出すと「は」(おれ)は、何んの事だ。人を殺す気なら、うぬの命から捨て来い。

文蔵 ……。 (苦しきうに表を伏せる)

浅二（冷笑的に、仕方にて示す）又この竹鎗のだらしなさ……、ブルくくく顫えてゐる臆病者の胴顫えが、握った穂先からおいらの手首につたはつてな（……）、実にざまはなかつたよ。は、は、は、。臆病者！卑怯者！

(B)の形では文蔵と浅二郎はほぼ対等に描かれているが、(D)になると文蔵が感情をより露わにし、浅二郎の方が優位に立つ構図に変えられる。忠次のなかの二つの内面の対立という点では、むしろ(B)の方がバランスは取れているが、この関係は(D)への変化によって崩される。引用17の加筆箇所と同じように文蔵の感情がより明確に描き出されるが、ここにおける感情は悲しみや苦しみである。そして常に沈着で真つ当な判断をしているように見えながら、実際はこそこそと動きまわる文蔵の弱さ（すなわち忠次の弱さ）が浅二郎の悪口「臆病者！卑怯者！」として突きつけられる。第三幕で忠次は文蔵を「自分の弱さ」であると言いが、引用19で対立する二つの内面に差を付けることで、この後の忠次の「決意」がより説得力を持つようになっていく。

次に、この部分を右とは異なる観点から捉えてみたい。引用18の最後にある「脇差の鏢に拇指をかける」という両者の対立を力で争わそうとする活劇的な要素は(D)では削除され、感情の対立に切り替わっている点も重要である。文蔵と浅二郎のやりとりはそのまま忠次の内面の対立であるので、その具体的な表れも感情の闘争へと変化しているのである。同じような調節が【直筆資料Ⅱ】にも見られるが、これは後述する。

さて、②(B)から(D)にかけて文蔵の感情面が加筆されることを見てきたが、同様に浅二郎の一徹さも強調されるようになる。続いてはこの部分がよく分かる②(C)から(D)への改稿を見てみたい。次の引用は【製本版】の本文にはならなかった箇所、別バージョンとしては長い本文を持つが、資料的価値を重視して全文を掲載する。

引用20【直筆資料Ⅰ】②(C)…【全集】五八～五九頁)

浅二 何が考違えだ。おれは只、親分が一心に思込んでゐる性根を、遂げさせて上げるのだ。

文蔵 親分の性根？そりや何んだ。

浅二 親分の苦勞はこの頃、貧乏人に食はせたいばかりだ。だから食はせるのよ、誰が食はせたとて差支はねえだらう。

文蔵 (その愚直に呆れつ、手を掴んで) 武井の、それちやお前は、親分の苦勞を救ふ気で、こんな無法なことを初めたのか。お前一人か、仲間誰だ。

浅二 知らねえ、云はねえ。無法と云ふのは、人を食はせねえやうにするやつが無法中へを云ふんだ。食はれねえやつが食中ひたいと云ふ(はふとする)のに無法はねえ。

文蔵 親分の身に、萬一難義がか、つたら何うする。

浅二 おれが為たんだ。親分の知つたことちやねえ。親分は、代官所などを拝み奉つて、今にそこから後光でも射すやうに思つてるが、あの悪人めらに何が出来る。百姓を騙して、年貢を

とりたいばかりに、今にお救が出るの、お下金があるのと、世間体を欺いてゐるんだ。

文蔵 然うか。一徹者のお前だ、おれの云つたぐらゐぢや聞くめえ……。

次の引用はこの部分に続くものである。

浅二 おい、何処へ行くんだ。この竹ッ切の始末をつけてくれ。

文蔵 何——？

浅二 おれの体をねらつて突出した竹鎗だ。意趣か、遺恨か、何の爲めにおれを殺したいのか、その因縁を聞かしてくれ。

文蔵 用が済んだ竹ッ切だ。焚付にても燃してしまへ。

浅二 何——

文蔵 あの竹藪からそれを突出したのは、その者を殺<sup>ば</sup>らしたためぢやねえ。穂先についた血を見たかつたのだ。脾腹をねらはず、向臈に突出したのもその爲めだ。

浅二 何——

文蔵 薄々は、お前「なぞ」(あたり)の仕業ぢやねえかと、疑はないぢやなかつたが、兎に角、どこのどいつが世間を騒がし、親分の身に難義をかけるか、その竹鎗の血潮からたぐり出したかつたのだ。用は済んだ、燃してしまへ。

② (C) の末尾にあたる箇所を引用した。(C) の本文はこの部分で

切れる。そしてここに重ねるように【製本版】のテキストとなる(D)が書かれる。次に(D)で書き換えられた部分を引用するが、浅二郎らしさをより明確にした「おれが為たんだ。親分の知つたことぢやねえ。」の書き換えに注目してもらいたい。特にこの部分は浅二郎の科白が長くなり、どのように変化したのかが分かる箇所となっている。

引用21【直筆資料I】② (D) … (『全集』五八―五九頁)

浅二 何が考違えだ。おれはたゞ、親分の念願を何うか通してあげたいと思ふだけだ。

文蔵 親分の念願とは？

浅二 この頃親分の苦勞はたゞ一つ、貧乏人に食はせてえばつかりだ。だから、おらア食はせるのよ。誰が食はせたつて、貧乏人は食ひさへすりや好いんだ。

文蔵 浅二、お前はそれぢや、親分の苦勞を救ふ気で、こんな無法を初めたのか。棒組は誰だ、二人三人ぢやねえ、云つてくれ

浅二 知らねえ、云はねえ。無法と云ふのは、百姓を食はせなくするやつを云ふんだ。食はれねえやつが食いたいと云ふのは、決して無法ぢやねえ。

文蔵 親分の身に、萬一のことがあつたら何うするんだ。

浅二 おれが為たんだ。親分の知つたことぢやねえ。親分はな、この頃急に代官所を拝み奉つて、お救米だの御救助のと、今に

そこから後光でも射すやうなことを云つてるが、あんな悪人めらに何が出来るんだ。うぬが職掌の年貢を取立てたいばかりに、百姓どもを騙くらかへして、御上「十一」(様の)御恩徳を吹聴し廻つてゐるんだ。おらあ初め、親分の為ることに気が入らなかつた。凶作で米の出来ねえ年は、百姓が食ひねえのは天災で仕方がないと思つてゐたが、段々百姓どものなかに首を突込んで見ると、そんな訳のもんぢやねえと云ふ理窟が分つた。食はせなくするやつがあるから、食へねえ者が出るんだ。

文蔵 ぢやお前は、何うでもその考を引戻されねえのか。

浅二 遣つてるうちに面白くなつた。又、遣るのが当前だと思つた。

文蔵 然うか……。 (嘆息して) 一徹者のお前だ、一通りぢやおれの云ふことを聞いてくれまい……。 (立つて歩み出す)

浅二 おい、文蔵、この竹ッ切の始末は何うしてくれんだ。

文蔵 おれの方ぢや、用の済んだ竹ッ切だ。風呂の焚付にでもしてくれ。

浅二 いや、焚付にやらねえ。一度はおれの体を狙つた鎗だ。おれは大事にして仕舞つて置く。

文蔵 うん、然うだ。それはお前の手に残つてゐる方が、どつちの為めにも好いだらう。

浅二 何——？

初演の同時代評<sup>(26)</sup>に、武井の浅二郎が「搾取階級の魂胆を見破るのは、ちと出来すぎ」という指摘をしているものがあつたが、本文の変遷を見ると、浅二郎の強盗の理由が引用20の段階よりも細かく書かれていることが分かる。その結果として前稿に比べると浅二郎の科白は明らかに長くなり、頭より体が先に動く性質の浅二郎らしくない科白が続くが、「食はせなくするやつがあるから、食へねえ者が出る」という認識のもとに、真つ当な解決方法では百姓を救済することはできないのだという主張がはつきりと述べられる。この部分は、青果の「性格的対位法」から捉えれば物事を道理の面から解決しようとする心情と、無職渡世こそが今の百姓の窮状を救済できるのだという俠客としての論理が対決する場面であるのでこのような書き方になっていると考えられる。改稿の過程を見ると、はじめに大まかな物語の展開を描き、そこに登場人物の個性を盛り込んで心情の対立を際立たせていく様子がわかる。

なお引用20における文蔵の「あの竹藪からそれを突出したのは」と「薄々は」の二つの科白は、(D)の本文ではこの場所より前の、引用19の「臆病者！卑怯者！」に続く本文に部分的に付け足されている。

以上ここまで、「直筆資料Ⅰ」②を中心に第二幕における本文の変遷を検討してきた。資料が豊富に残っていることから、青果の執筆方法を読み取れるとともに、本文が重複する箇所からは、清書にはならなかつた別バージョンについても知ることができた。これらの改稿過程から分かるのは、第二幕の主眼である「性格的対位法」に基づいた文蔵と浅二郎の人物像の対照と陰影の付け方、そして心理面での対立が前景化され

るということである。

ところで引用18で、活劇的な要素が減らされるということを描したところが、同様の修正は第二幕の後半にもある。ここまで、場面が重なる所をおもに検討したために触れることのできなかった【直筆資料Ⅱ】についても、同じような方針による改稿が見られることを最後に指摘しておく。第二幕の後半、お町をめぐって伊三郎との間に揉め事が生じ、代官所にも国定の子分が強盗を働いていることが露見しそうになり、文蔵が浅二郎にこの土地から出ていってくれという場面である。

#### 引用22【直筆資料Ⅱ】…【全集】七三頁

浅二 やり出したからにや止められねえ。何うで三尺高いところへ晒される首だ。暴れ「る」へられる」だけ暴れて、自分の首でも些ッたあ相場を上げて置きたいと思ふんだ。

文蔵 うぬ——。

文蔵、いきなり浅二に切付「ける」へけんとす」。中合三合して文蔵「浅二郎、その刀を抜か」せず、二揉み三揉みして文蔵を振伏せる。

ト書きの削除部分に注目してもらいたい。当初の案では文蔵が刀を抜いて、浅二郎と斬り合う場面が構想されていたことがわかる。しかし、それは修正されて二人の揉み合いとなり、文蔵は浅二郎にあっけなく組み伏されてしまう。そして親分の腹心同士、双方が傷ついてはお互いに損じゃないかと訴える文蔵に、浅二郎は自分を狙った竹鎗の切れ端で文

蔵の額をなぐることで、ひとまずはこの場を収める。

この後、切れ端を文蔵に向かって放り投げ、風呂の焚き付けのためにお前にくれてやるよと言った浅二郎に向かって、文蔵は「然うか、有難う貫つて置こう」と返事をする科白があるが、この場面には、第二幕で描き出された浅二郎と文蔵は、その考え方や生き方こそ真つ向から対立し合うものの、共に忠次を思う者同士、お互いを憎みきめることはできない間柄であることが示唆されて、第二幕は終幕となる。

#### 五―(3)・第四幕(大詰)の改稿過程

第三幕はカーボンコピーの本文があるだけで、直筆原稿は見つかっていないため、続いては第四幕(大詰)を検討する。

#### ・第四幕その一「赤城山湯沢付近」、その二「赤城神社々前」

大間々街道で飛脚の三千両を強奪し、また岩鼻の代官屋敷を襲って、先の三千両と代官所の貯蔵の米穀を窮民に施した忠次は追われる身となり、子分とともに赤城山に立てこもる。国定一家が山中で討手の動向を警戒するなか、身をやつした若い女が酒を持って忠次のもとに向かうのを引き留めるが、浅二郎はそれがお豊であると見抜く。仲間からの情報で彼女の目的を知った浅二郎はお豊を捕える。その晩、忠次は討手と命を賭して戦うことを伝えるが、日光の円蔵は本音では忠次を逃がしたいと思っっている。お豊を忠次の許へ連行し、毒殺の目的を明かした浅二郎は、彼女にその酒を飲んでみるという。お豊の気持ちを察した日光の円

蔵は、彼女に盃を渡し、自分もまたそれを飲む。毒が二人の体をまわりはじめ、苦しむなか、忠次にはぜひ生き延びてほしいとお豊と円蔵は懇願し、忠次は決戦の意を覆して生きることを選択する。

#### ・「第四幕（大詰）」の検討で用いる資料

「その一」の検討には【直筆資料Ⅲ】の②「大詰（その一）」と【製本版】の本文、「その二」の検討には①③の「大詰（その二）」と【製本版】の本文を用いる。「その二」は直筆原稿が二種類残っており、執筆の順序は①から③という流れである。

#### ・初出『富士』に関する書入れ

【製本版】には初出の『富士』に関する書き入れが二カ所あるので紹介しておく。まず一箇所目は【製本版】一五四丁オの右肩に赤鉛筆で「寄稿原稿コレマデ也 七月九日」と記されている（図3）。そしてこの書き入れと対応するように、忠次の科白「今日、箕輪からの」（『全集』一〇七頁）にはじまる「あの黒檜山の裏づたへ老神をか／＼けて追貝に出れば」の「／＼」の部分に赤鉛筆でL字型の印があるが、その後、これらの書き入れとともに抹消されている。二箇所目は末尾の二六六丁オで、同じく赤鉛筆で「富士原稿半ピラ六十五枚ニテ終ル 第四八六六枚ヨリ」と記されている（図4）。「半ピラ」とは原稿用紙の片面（半丁）のことであるが、詳細は不明である。

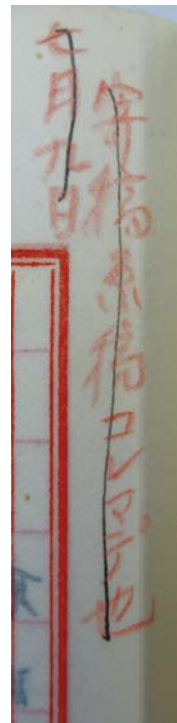


図3 【製本版】  
154丁オの書き入れ

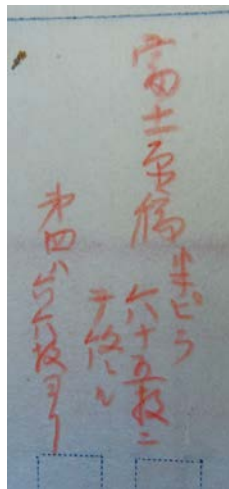


図4 【製本版】  
166丁オの書き入れ

#### ・第四幕「その二」の改稿過程

それでは内容に入る。亭々居稿本の原稿用紙に書かれた草稿は、事務用箋のものよりも修正している箇所が多く見られる。紙幅の関係上、修正箇所を細かく引用することはできないので、ここでは第四幕の「その一」、「その二」で大きな変更が行われている箇所を適宜引用しながら本文の変遷をたどっていく。

【直筆資料Ⅲ】②の一枚目には赤鉛筆で「五枚より書直し」とあるが、冒頭から最初の四丁分（原稿用紙四枚分）を除いた、五丁目以降から「その一」の末尾までが残っている。赤城山湯沢付近に潜伏している忠次達の様子を描いたト書きと、米吉、角造、猪之助らが会話をしながら石を集めてへっついを作る場面が五丁目にあたる。

まず、第四幕の修正箇所が目立つのは、討手に関する記述に多く手が入っているところである。

引用23【直筆資料Ⅲ】②…『全集』九七頁

猪之「代官」(役人)どもは、忠次一家も恐いが、後に扣える百姓

衆も恐いんだけ。

米吉 当り前よ。飛脚を切つて大金を盗んだも、代「官」(官)所

の蔵を打破つて米麦をまき散らしたのも、みな百姓衆「を」

「に」施行のためだ。

角藏 上州一体の忠次大明神様だ。は、は、は、。

同じく討手に関するもので、次は土地が修正されている箇所を引く。

引用24【直筆資料Ⅲ】②…『全集』九七頁

友五郎 渋川口沼田口の裏山には討手の人数が廻りかねると見え

て、あの方にや百姓衆が、每晚忍んで食物をはこ「ん」(ん)

で来る」さうだ。

才市 そして神崎、いよ、よ、「前橋」(高崎)の藩中から討手を

「叩ける」(繰出す)といふ、あの噂は何うなつた。

討手の情報をより具体化している。この土地の情報については、林部に毒酒を持たされたお豊が登場する所でも修正されている。次は浅二郎がなぜお豊がここにいるのかを問いたです場面である。

引用25【直筆資料Ⅲ】②…『全集』一〇一頁

浅二 お前さんは、三ッ木村の「文」(死)んだ文蔵のところじゃ

話になつてゐると聞いたが、大層遠くまで沢蟹を探しに来ま

したね。

お豊 え、。

浅二 「山」(麓)の「四方」(口々)には関八州の御代官が、持場

を固めて攻めあぐんでゐるこの騒動を、お前さんだつて知ら

ない筈はあるまいに、姿をやつして谷間の熊笹がくれに山に

のぼらうと……、些と所作が大胆過ぎ「やち」(るぢやねえ

か)。

これ以外にも修正および加筆をしている箇所は多いが、②の修正後の本文は【製本版】の本文と概ね同じである。ただし明らかに青果の誤記と思われる部分は筆耕者によつて修正されている。

引用26【直筆資料Ⅲ】②…『全集』一〇三頁

お豊 (少し語調を変えて) けれども、若し親分の身にか、はるや

うな用事があつたら……

浅二 (石に腕掛け「組」(腰)組み) 通さねえ、通さねえ。

【製本版】では、お豊の科白は「(少し語調を変へて)」に、また浅二郎の科白は「(石に腰掛け腕組み)」と記されている。

さて第四幕においても、第二幕で見られた執筆方法、すなわち場面を



一度区切り、少し前から重ねて書き始め、その先を続けていくというスタイルがここでも用いられている。「その二」の末尾の部分では、最初案に続いて、次の丁に第二案が書かれており、カーボンコピーの清書では両者が組み合わさっている。二つの草稿と【製本版】の本文を並べて検討してみる。

引用27 【直筆資料Ⅲ】②…【全集】一〇四頁

浅二 必ず酒だな。

お豊 え、。

浅二郎 ツカ〜と進んでいきなり女を蹴倒す。

お豊 あれ、何をする——

浅二 (傍にありし荒縄を拾つてグル〜に縛り) 騒ぐな、うぬの心に聞いて見ろ!

この場面は二つ目の浅二郎の科白から次のように書き継がれる。

引用28 【直筆資料Ⅲ】②…【全集】一〇四頁

浅二 (グル〜縛りつ、) 何を騒ぎやがる。うぬが心に聞いて見

ろ。力松、お前御苦労だがこの女「十へに猿」轡をはめて、

おれの四本櫓の岩穴へぶち込んで置いてくれ。

力松 「八え。」「よし来」た!

——幕

引用28は、先の引用27の末尾から、丁を改めて書いた草稿であるが、

ここではすべて引いてある。なお「縛りつ、」の下の部分に赤鉛筆でL字型の印が付けられているが、前案との接続を意味する印であろう。この二つの案は【製本版】では次のように組み合わされる。

引用29 【製本版】…【全集】一〇四頁

浅二 (傍にありし荒縄を拾つてグル〜に縛り) 騒ぐな、うぬの

心に聞いて見ろ! 力松、お前御苦労だがこの女に猿轡をは

めて、おれの四本櫓の岩穴へぶち込んで置いてくれ。

力松 よし来た!

——幕

念のために注記しておく、本稿は草稿から【製本版】の本文(カーボンコピーの本文)までの変遷を追っているので、加筆部分は反映していない。この部分は筆耕者が「グル〜に縛り」と誤記をしているのだが、その後黒ペンで「縛」と直されている。

・第四幕「その二」の改稿過程

次に「その二」を検討する。【直筆資料Ⅲ】の①と③は「その二」の内容をすべて揃えている。まず①の範囲は、冒頭のト書きから忠次が赤城山で討手と決戦する意志を子分らに伝えた後、酒盛りの最中にお豊が忠次のもとに連れ出され、林部に持たされた毒酒をお豊と円蔵の二人が飲み、その毒によって苦しむなか二人が忠次に「生きてほしい」と懇願する場面まで。そしてここで一度筆を止めて丁を改め、十五夜の月の下

で忠次の手によってお豊が忠次と酒を飲む場面が右記の場面とは独立して描かれる。

「〔十二枚より書直し〕」の覚え書きが入った③は①と内容を重ねながら寅次の現状を忠次に伝える場面（『全集』一一二頁）から書き始め、①の末尾にあった二人が酒を飲む場面を取り込みながら末尾まで書かれている。

「その一」と同様に数多くの修正が行われているが、やはり目を引くのは重複する場面の比較によって本文がどう生成していかをたどることができる点である。ここでは最初に大きく改稿されている箇所を確認したあとで、①と③が重なる部分を中心に考察していく。

#### 引用30【直筆資料Ⅱ】①：『全集』一〇五頁

同じ夜の五ツ半時、今の午後九時頃。赤城「山上の太洞に」へ山上大洞と称する地点、赤城神社前の林のうち。

へ一行アキ

赤城神社は赤城湖（大沼といふ）の南「方」へ、大檜の林に囲まれたる湖畔に鎮座し、延喜式にも出て、東国「の」に著名なる古社なり。「舞台上」へ「光景として」見ゆるはその神前にて、上手の方よりその祠殿の一部分を舞台に突出す。「前」へその階前なる舞台に「糸」へ「糸」の檜の老木数十本立ち、暗緑鬱蒼として頭上を掩ふ。その樹間をすかして背景全面は大沼「へなれど」も、未だ「用上」へ「月上」らざれば湖面は模糊として明か

ならず、「薄光の」へ「漂ふが」如き薄明の間に小「島」へ「島」ヶ嶋の幽邃を微かに見るのみ。「」へ「時」刻は今の九時頃なれど、大沼は山上の湖水なれば、月の出はなはだ遅きなり

この後も細かい修正箇所は続くのだが、地の文はここまでとして、次は会話の場面を引用する。

#### 引用31【直筆資料Ⅱ】①：『全集』一〇七頁

忠次「中」へ「今日」、箕輪からの矢文で見りや、いよ、御公儀「へ御老中方」の腹も据はり、高崎松平右京亮「の」へ「さま」へ、忠次「」へ「征」伐の「討手の」へ「手」数を出すやう、厳しい御下知が「下」へ「到着し」たさうだ。今時の「大名」とは云ひながら、兎に角相手は「木名」へ「八万石」、こつちは後に「人数」へ「徒党」のねえ、これ限りの山籠りだ。切つて出ても助からず、守つてゐてもいづれは死ぬ、どつちにしても助「からね」へ「かりつ」このねえ場合だ。「…」

修正部分は全体に及ぶが、赤城神社周辺の情報や討手に関するもの集中在している。次は人物の科白を加え、場面に変化を付けたものである。

#### 引用32【直筆資料Ⅱ】①：『全集』一一一頁

浅二「然るか。酌をしやうか。」へ「屹度飲むね。」

「中田蔵」へお豊「おれが注がも。(神前の土器を)へお前さん何かこの酒に、仕掛けでも」あると思つてるのかい。(淋しく笑つて)

長籠城をすると疑ぐり深くなるものだねえ。

浅二 然うか。酌をしやうか。

円蔵 そのお酌は、おれにさししてくれ。(神前の土器をとりて) お豊さん、さア一つ。

浅二郎はお豊が持つてきた酒を彼女自身に飲ませようとするが、浅二郎の催促に対するお豊の嘆きを新たに書き加えることで、浅二郎にやり返すと同時に、言いなりになるだけではないお豊の強さを印象づけている。このお豊の強さは、この後に引用する忠次に「生きてほしい」と懇願する時の説得力にも繋がってくるものである。人物の科白を一つ加えることで、場面に変化を加えている様子を読み取ることができる。

それでは「その二」の内容に関わる大きな変更が分かる箇所を見てみたい。場面はお豊が忠次の前に引き出された後、息子の寅次は見知らぬ夫婦に譲ってしまったという養寿寺での発言は偽りで、寅次は僧侶となつて生きているのだと伝え、忠次に決戦の覚悟を翻意して逃げ延びて生きてほしいと懇願するところである。

引用33 【直筆資料Ⅱ】①…『全集』一一二〜一一四頁

忠次 銚子の浜で千箇寺参りにくれてやつたと云ふのは、お前あの時の嘘なのか。

お豊 「中お」親分、お前さんあの時あたしに帰れと云つたが……

帰れないんだよ……、帰れる体ぢやなかつたんだよう。(身を顫はして泣く)

忠次 え……。

お豊 親分、遁げておくれ。

忠次 何？

お豊 毒と知りつ、渡された酒を、あたしが山へ持つて来たのは、お前さんに腹を切らせるためぢやない、遁げかくれてもお前さんだけは、この世に長く生きてゐてもらひたかつた……

円蔵 親分！(毒のため言語少し言語むつれつ、)おれの頼みもお豊さんと一つだ。お前さんはわが為め人の為め、こゝで犬死する人ぢやねえ。磨けば輝き研げば光るお前さんのやうな大達者は、百年たつても又生れる者ぢや「中」へ「ね」え。末代かけて無職渡世の看板になる人はお前さんだ。

お豊 親分、百姓衆に一揆を起させ、□内三郡を騒がした上、大勢の百姓衆を仕置場に送り、諸方に泣きを見せたいんですか。親分が無事に国越をしたと聞けば、騒動も鎮まり「中」へ「お」百姓衆も安心して、徒党は今日にもくづれます。親分、お前さん一人の意地を立て、死急ぎなさる時ぢやありませんよ。親分……

円蔵 親分……

忠次 (「疑中」取) 絶る二人を見て暫く考へたる後) うむ、生きやう。

おれはこれから二人のためにも、おれにそなはる世の光を見

やう

この少し前より十五夜の明々団々として「上中」(山)に上り、湖水の面は絵のごとくかゝやきわたる。

①の草稿の段階では忠次とお豊の対話だけが続き、あっさりした展開である。①の草稿はここで一度切れ、次にお豊と忠次が柄杓の酒を交わす断片が書かれる。この後に組み込む内容の下書きとなる部分であると思われる。

引用34 【直筆資料Ⅲ】①…(『全集』一一四―一一五頁)

お豊 お、親分……、長く、長く生きて下さいよう……。 (喜びの

余り昏倒せんとする)

忠次 これ、お豊、しツかりしろ、月が「上中」(のぼ)つた、月が

上つたぞ!

お豊 お、お月様が……。

忠次 (樽の酒を柄にて酌み、自分が半飲みたる後) それお豊、久しぶりの酒だ。

お豊 はい……。

お豊、ニツコリして倒れる。

以上が①である。物語の展開そのものは変わらないが、ここに様々な

要素が付与され本文は変化していく。では③で先の引用33と引用34がどう変わるのかを見ていく。

引用35 【直筆資料Ⅲ】③…(『全集』一一二―一一三頁)

忠次 (思はず側に来て) それぢやお前、銚子の浜で千箇寺参りにくれたと云ふのは、あの時の嘘なの「上中」か。

お豊 親分、お前さんあたしに暇を出す時、何んと云つてあの兎を

あたしに渡しました。おれは生れた気性から、この稼業で身をはたすが、二代つゝいて悴にまで……こんな「上中」(危)ない

日を送らしたくない、寅次だけは堅気に仕立て、くれと、お前さんあん時、あたしに「頼」(……)頼んだぢやないか。

忠次 ふむ、……。

浅二 (びっくりして) 姉さん、そんならお前さんなぜあの時、あんな愛措づかしを云ひなすつたのだ。

お豊 浅さん! (その手を掴み) 親分はねえ、あの時あたしに帰れと云つて下すつたが……、女の弱さ貧しさから、帰れないんだよ……。帰れる体ぢやなかつたんだよう。(身を顫は

し、声をあげて泣伏す)

一同、暗然として目を伏せる。

お豊 (突然顔を上げて) 親分、さ、遁げておくれ!

忠次 何——。

①(引用33)の本文から③(引用35)へと大きく加筆され、③で修正

されたものがそのまま【製本版】の本文になる。すぐに気がつくのはお豊の科白が増えている点である。彼女の科白に、忠次の息子に対する思いを汲んだこと、さらに自分は忠次のもとへ戻れるような体ではないのだという二つの要素を取り入れることで、母であり妻としてのお豊を印象づける改稿となっていることがわかる。そして、忠次とお豊だけの会話だった前案に、浅二郎を絡ませることによって忠次を思うお豊の思いと、浅二郎の誤解を解く要素が付け加えられる。この後にお豊と円蔵が忠次の覚悟を翻意させる場面が続くが、ここでも場面の起伏を大きくした変化を付けている。続く部分を引用する。

引用36 【直筆資料Ⅱ】③…〔全集〕一一三〜一一四頁）

お豊 毒と知りつ、渡された酒を、あたしが持つて上つて来たのは、お前さんに腹を切らせるためぢやない。遁げかくれてもお前さんだけは、この世を長く生きてゐてもらひたかつた……。

円蔵 （毒に不自由なる言語にて）親分。おれの頼みもそれ一つだ。お前さんはわが為め人の為め、こゝで殺すにや惜しい人だ。磨けば輝き研げば光る、お前さんのやうな大達者は、百年たつても又生れる者ぢやねえ。末世末代無職渡世の、看板になる人はお前さんだ。

お豊 親分、討手が恐くつて遁げるんぢやないよ。お前さんがこゝで頑張れば、山下三十何箇村の、お百姓一揆が起るんですよ。今日すら食ふに困る人々を騒かせ、大勢の百姓衆を仕置場へ

送つて、諸方に泣きを見せたいんですか。お前さんさへ無事に国越「をすれ」へしたと聞けば、騒動も鎮まりお百姓も安心して、田島の仕事にも出られるんですよ。親分、お前さん一人の意地のために、死急ぎなさる時ぢやありませんまい……

細かい表現が修正され、円蔵の科白にはリズムも生まれている。

ここで二つ目のお豊の発言に注目する。①（引用33）では忠次の意地と百姓衆の命を秤にかける言い方だったのが、ここでは忠次や困窮する百姓衆の立場を汲みつつ説得するものに変わり、忠次や周囲の者の気持ちに寄り添いながら決意を変えるように訴えている。前案よりもお豊の配慮や説得力が増している。次に①の最後の部分（引用33）にその直後の断片（引用34）がどう本文に組み込まれたのかを見ていく。

引用37 【直筆資料Ⅱ】③…〔全集〕一一四〜一一五頁）

円蔵 忠次どん、おりや苦しくなつた……。

〈この時十五「月」夜〉の明日、団々として山の端を上る。月光湖面に落ちて絵のごとくかゞやく。〉

忠「蔵」へ次（決心を定めて）うむ、生きやう！おれはこれから二人のために、おれにそなはつた世界を作らう。

お豊 お、親分へ！それぢやお前さん、草鞋をはいて下さりますか……。〔喜悦のあまり昏倒せんとする〕

忠次 これ、シツかりしろ。(抱きか、へて) お前が「待」待

た月が「上」上「のぼ」つた、月が「下」下「のぼ」上「上」つたぞ。それ!

お豊 お、十五夜の月が上つた……。

忠次 (樽の酒を柄杓にて汲み「中」中「へ」自分が半飲みたる後) それ、

お豊。久しぶりの……忠次の酒だ!

お豊 はい……。

お豊、ニツコリして前に倒れる。円蔵も昏倒せんとす。

浅二 日光の叔父さん、シツかりして下せえ。

円蔵 浅、忠次さんの声を聞きてえ。この世でたのんだ只一人の、

男の声を聞えて死にてえ……。

忠次 円蔵どん、お前にも長い間苦勞をかけたが、今さし上ぼるこ

の月に、忠次の迷ひは吹きはれた。生きるために初めた渡世

を、死ぬまで貫くのも男の意地だ。無法が通る世の中にや、「無

法」(「道理や遠慮ぢや」でなくちや生きられねえ。円蔵どん、

忠次はこれ「から」覆輪かけて、無法をもつて無法に「敵」

「向ひ」、一生血みどろに暴れ廻つて見せるから、何うか安心

して「死んで」目をつぶつて」下せえ。

円蔵 お、……。 (落「入」る)

③の修正後の文章がほぼ【製本版】の本文になるが、「聞えて死にてえ」は清書時に「聞いて死にてえ」に、「(道理や遠慮ぢや)でなくちや生きられねえ」は「道理や遠慮ぢや生きられねえ」に直された。

引用34の部分がこのように物語に組み込まれる。工夫が見られるのは単に場面に加えるのみならず、円蔵の言動をさりげなく増やしていることだ。いわば円蔵を接着剤にして断片を取り込んでいたのである。

円蔵は第一幕でも使いを立ててお町を養寿寺に呼び寄せていたように、忠次の「腕組み」にほとほと愛想を尽かしながらも、忠次の周りの女性にさりげなく気を配り、お町やお豊を通して間接的に忠次を支えようとす。終幕直前で円蔵はお豊とともに毒酒を呷り、お豊だけでなく自分も命を投げ出して忠次に翻意させようとするが、ここでも円蔵は忠次とお豊をつなぐ役目を担っている。第一幕、第四幕と忠次が大きな判断をするときにさりげなく関わる円蔵は、文蔵、浅二郎のように目立つことはないが、この舞台における重要な人物として描き出されているのである。

そして二人の懇願によって生きることを決意した忠次は一家を連れてかの有名な大戸の関所破りを敢行するところで「国定忠次」の幕は下りる。

## 六・小括

以上、本稿では眞山青果文庫が所蔵する「国定忠次」の関係資料を検討してきた。ひとまず小括として本稿が明らかにしたこと、および今後の課題について整理する。

本文の変遷をたどるとというのが、本稿が設定した第一の目的であった

が、第三節で示したように、本稿で検討したのは草稿段階からカーボンコピーの本文に至るまでの変遷であり、カーボンコピーの本文に記された書き入れについては今後のさらなる検討が必要となる。本稿がたどった本文の変遷は、あくまで一部を考察したにすぎない。しかし、そのわずかな検討においても色々なことが明らかになった。まずは【製本版】が初演の「三幕六場」の構成を残す貴重な資料であること。初演の段階に限りなく近い本文を残していることが確かめられたことである。

次に青果の執筆方法についてである。残された草稿の検討を通して、青果がある一つの場面を書いたあとに一度区切り、少し前の場面から一部の本文を重ねて、その次を書き継いでいくという執筆方法が明らかになった。これは草稿資料が豊富に残っていたということが何よりも大きい。もちろん、他の作品の草稿との照合も今後必要となってくるだろうが、青果の作劇法を知る一つの手がかりとなるであろう。

各幕の修正については本論で触れてあるので、ここで細かい整理はしないが、第二幕の考察では、青果劇に特有の「性格的対位法」が文蔵と浅二郎の加筆箇所をたどることによってより明確に描き分けられている様子も読み取ることができた。このような細かい修正の積み重ねが【製本版】の本文を形成しているのである。

今後の課題としては、【製本版】、【カーボンコピー資料】の本文に加えられた箇所について、様々な「国定忠次」の本文を手がかりに、どの段階でどの修正が行われているのかをできるだけ明らかにすること、それによって【製本版】以降の変遷を追いかけられることと思われる。

残された資料を前にして、本論が考察できたのはほんの一部であるが、研究の可能性はまだまだあることを記しつつ本稿を閉じたい。

〔注〕

- (1) 国文学研究資料館展示室、二〇一六年二月一日～翌年二月二四日。
- (2) 於学術総合センター・一橋講堂、二〇一六年二月三日。
- (3) 青木稔弥・青田寿美・内田宗一・高野純子・寺田詩麻・大貫俊彦「眞山青果文庫調査余録」(『調査研究報告』第四一号、二〇二二年三月)
- (4) 人名表記については、実在した人物は「忠治」、青果作品に登場する人物は「忠次」を用いる。
- (5) 行友李風『行友李風戯曲集』演劇出版社、昭和六二年一月。
- (6) 尾崎秀樹「国定忠治と三人の作家」『テアトロ』第四二七号、昭和五三年九月。
- (7) 加賀山直三『新歌舞伎の筋道』(木耳社、昭和四二年九月)。なお本書では「忠治」と表記しているが引用に際し「忠次」に訂正した。
- (8) 『富士』第五卷第八号～第一〇号、昭和七年八月号から一〇月号に三回にわたって掲載された。実際は一月前に印刷、納品されている。
- (9) 千谷道雄「眞山青果」『日本の劇文学』昭和三〇年一月、東京大学出版会。
- (10) 「農村問題に結ばれて問題となつた国定忠次」『二六新報』昭和七年七月二日。
- (11) 「歌舞伎座国定忠次 面白い夜の出し物」『読売新聞』夕刊、昭和

七年七月一七日。

新報』昭和七年七月七日。

- (12) 加賀山直三「真山青果の『国定忠次』」『真山青果全集』月報第一四号(第五卷付録)、昭和五年七月。
- (13) 真山青果文庫の資料は未整理の部分があり、「国定忠次」の資料のなかに「続国定忠次」の原稿が紛れていることもあるため、今回見られなかった「第三幕」の草稿などが今後出てくることもありうる。
- (14) 資料は、箱ごとに管理されている。函架番号とは資料が保管されている管理番号を指す。
- (15) 参考までに『真山青果全集』(第五卷、講談社、昭和五年七月)のページ番号を記載する。以下『全集』と表記する。
- (16) 該当箇所を以下に記す。(1) 忠次の「お前たちの不足も」(『全集』一六頁) 〱才市等の「カ所目の「へえ。」(同一七頁) まで。(2) 忠次の「これは又……」(『全集』二三頁) 〱林部の「いや、然うではない。わしは其方のご」(同頁) まで。(3) 民五郎の「親分え」(『全集』三二頁) 〱お町の「いよ〱今日持出」(同頁) まで。
- (17) 本稿が考察対象を【直筆資料】からカーボンコピーの本文までとした理由は、草稿資料が豊富にあることに加え、複数の筆記具で記されている【製本版】の書き入れについては時期が特定できていないことによる。ただし一部言及したほうがよい場合はそれと断ったうえで参照することにする。
- (18) 「新時代色をもつた三幕六場の大芝居」(「左団次の国定忠治」『二六新報』昭和七年七月七日)。
- (19) 『時事新報』夕刊広告、昭和七年七月六日。
- (20) 実際に【製本版】を見ると、この幕の割り当てについては何度も直した痕跡があり、かなり迷っていた様子が加筆箇所から見て取れる。初演の「三幕六場」の構成になっているのはカーボンコピーの本文に一部の文具で「加筆した段階」であるが、これについてはカーボンコピーの本文の原案も含め、どの筆記具でどう直しているかなどを踏まえた詳細な検討が今後必要となる。
- (21) 「演劇」欄『都新聞』昭和七年七月八日。
- (22) 『真山青果戯曲上演舞台写真集』講談社、昭和五三年五月。
- (23) なお『富士』第五卷第一〇号には「第四幕」(「大詰」)にあたる部分に掲載されているが、誌面には「第四幕」の記載はない。ここから「第三幕」の続きではないかとも思われるが、「赤城神社々前」(すなわち「第四幕」の第二場)には「その二」と書いてあり、この本文が第三幕とは別のものであることが分かる。
- (24) 青々園「佳作国定忠次」『都新聞』昭和七年七月八日。
- (25) この原稿の余白に書かれた「四十一枚より」の数字は【製本版】の四一丁と対応している。
- (26) 「歌舞伎座国定忠次 面白い夜の出し物」『読売新聞』前掲。



〔附記〕

本稿は星槎グループ「眞山青果蔵書研究助成事業」による研究成果である。また、執筆するにあたり、資料の閲覧・撮影ならびに掲載について、星槎ラボラトリーおよび国立国会図書館よりご高配を賜りました。末尾に記して感謝申し上げます。

